

## 山梨県若者海外留学体験人材育成事業(大学生等コース) 留学結果報告書

7月、予定よりも早く、10か月の留学を終え日本に帰国した。留学中、ベトナムでの生活が日常になることはなく、毎日が新しさや刺激に溢れていた。非常に濃厚で充実した留学生活であった。

この報告書では、今回の私の留学の一番の目的であった農村の観光開発事業についてを中心に書いていきたいと思う。また、その経験や学びから私が感じたこと、これからの進路について現時点で考えていることを書いていく。

初めて私がそのサイトを訪れたのは留学が始まってすぐ、安藤ゼミで夏休みにベトナムフィールドワークに参加した。ゲアン省コンクオン郡にあるヌア村という住民主導型の観光を行っている農村で、ホームステイを運営している家に実際に泊まりながら、実際にそこで行われている観光の商品、サービスに触れながら、ヘリテージツーリズムの実践事例の視察と、その地域で観光業に従事している住民に観光開発が行われる前と後で、生活や地域住民同士の関係にどのような変化があったのかなどについて一週間程度ヒアリング調査を行い、最終日には地域の住民の方たちに調査結果の発表と、自分たちが感じたことについて若干の提案を行った。そして最終日には私たちが考えたその村の観光についての若干の提案を行った。そしてそのことは、後日ベトナムの全国英字紙の一面に掲載された。

その村に住む人々はその村のことを本当に愛していて、協力し合いながらその未来に想いを馳せていた。また、そのフィールドワークを通じて私はベトナム語も話せない、専門性もないよそ者の私にできることの少なさを痛感し、申し訳なさを感じたこともあった。

3月上旬には、私の指導教官である安藤勝洋講師がベトナム、ゲアン省で行っている JICA プロジェクトへの出張に同行をさせていただいた。ホーチミンの誕生の地としても知られているゲアン省ナムダン郡という地域の、観光マップを作成する一連の行程の進行を手がけさせていただいてる。その観光マップは、マップとは言っても、本質的には観光客向けのものではなく、ローカルの旅行代理店や、地域住民に対して、観光資源があることを発信することが目的であるという事を感じた。そこから現地の住民が自発的に自分たちの地域が持つ資源について気づき、知り、誇りに思う。そしてその魅力を発信する。このマップを作成することの意味は、そのプロセスを手助けすることであり、これこそが本当の意味での国際協力である、そう感じた。

写真撮影から始まり、マップのレイアウト、テキストの作成、翻訳を行い、今現在でもデザイン会社とのやりとりを含め、安藤講師と相談しながら進めている。

また、一週間の出張の中で、マップ作成と同時進行で様々な仕事を見学させて頂いた。伝統的な建築様式の残る村の保存を行うか否かを決定する会議にも参加させていただいたり、観光情報センターや、トイレの

## 山梨県若者海外留学体験人材育成事業(大学生等コース) 留学結果報告書

建設の過程にも立ち会いをさせていただいた。こちらも、ただ専門家が保存の必要性を語り、お金を出すことが全てではなく、最終的な決定を行うのは地域の行政であり、住民である。国際協力におけるメインアクターは紛れもなくその地域に住む人々である、そう肌で感じる事ができた、非常に有意義な一週間であった。楽観主義的な仕事観を持つベトナム人たちと共に仕事をする事の大変さと楽しさを改めて垣間見た気がした。ベトナムがまた好きになれた、そんな一週間になった。

また、私が現在所属しているベトナム国家大学人文社会科学大学と山梨県立大学との間で、包括協定が結ばれたことをきっかけに、山梨県立大学の理事がベトナム出張に来た。人文社会科学大学での学長との面談だけでなく、大使館や JICA、JNTO といった日越の公的機関への訪問や、ハノイ大学日本語学科との面談、ハノイ市山梨県人会への参加、休日にはハノイ市郊外への視察も行い、非常に密度の高い出張であった。出張行程中、ニンビンという世界遺産にも登録されているハノイ郊外の街に私が案内した際には、事故渋滞で車が動かなくなったり、ハプニングもあったがベトナムの良さを感じてもらえたのではないかと感じている。そして何より、私がこの大学に留学をした事で山梨県立大学における人文社会科学大学との新しい協力関係が始まったことは本当に嬉しく思っている。今後も人文社会科学大学との連携を図りながら、新しいプログラムの構築を目指していきたい。

インターンを退職し、一か月は、それまで定期的に続けていた日本語教育に集中することができた。私は県立大学で副専攻科目として日本語教育を履修していたが、それまでの知識は全く通用せず、役に立たなかった。大学内ではどうしても実際に「外国人に教える」という経験ができないため、指導案から作成を行い、同じ学生に対して定期的にクラスを受け持つことのできたこの留学は非常に有意義であり、学びの多いものであった。

留学生活最後の一か月は、ベトナムとの違いやそれぞれ国の観光について見たいと考え、ラオス、カンボジア、タイ、ホーチミン市にも足を運んだ。私はこれまでそれほど海外旅行を経験したことがなかったため、近隣の国々を訪問することができて良かった。その国にある独特な空気感やその地域特有の人々の生活や文化の違いを「学ぶ」とは違って「感じる」ことができた。陸続きであるのに、山を一つ越えただけで、人々の顔や生活、文字、すべてが違うことに今までにない面白さを感じた。

また、初めは大学の寮であった留学生活の拠点をホームステイにしたことはこの留学生活の中でも非常に大きな挑戦であったとともに、よい選択であったと感じている。ベトナム語のクラスを履修していなかった私にとって、当初ホストマザーとのコミュニケーションは困難であったが、今では現地での生活には困ることはほとんどなくなるレベルにまでコミュニケーションがとれるようになった。帰国後も何度か訪日ベトナム

## 山梨県若者海外留学体験人材育成事業(大学生等コース) 留学結果報告書

ム人観光客と会話もできた。

9月には、この留学中にできたドイツ人の友人の影響もあり、文部科学省のプログラムに参加しドイツを訪問する予定である。現地では若者の社会参画をテーマに現地の学生たちとディスカッションを行う予定である。ベトナムでできた世界中の友人たちとのつながりは本当に大きな財産であると感じている。これからもよい関係を築いていきたい。

さらに私は現在山梨県総合計画審議会の委員に応募しており、もし委員になることができれば、この留学での経験や学びから得たものを山梨県に対して投げかけていきたいと考えている。そして卒業後は、山梨県内で農業と観光を通じた地域振興についてより深く考えていきたい、ベトナムをはじめとする東南アジア諸国との双方向のツーリズムの実現に向けて事業を起こしたいと考えている。

また、いずれは大学院へ進学をしたいと考えている。農村開発学について学び、現在発展途上国と呼ばれている国や地域の特有のコミュニティ、エコシステムなどから、山梨のような日本の地方都市が抱える人口減少や産業衰退などの課題にアプローチする方法を考えていきたい。

今回一年間の長期の留学を終え、無事に帰国できたということは、自分にとって非常に大きな自信になった。また、ここでできた友人たちとのつながりや経験はこれからの人生の中でも本当にかげがえのない財産になったと感じている。家族や指導教官、そして大村人材育成事業の担当の方には本当に感謝している。また、私は一年前、この奨学金頂いて留学をすることについて新聞投稿を行った、奨学金とともに県民の皆様から大きな期待と責任を頂いたということを山梨日日新聞に寄稿した。これからの活動を通して、実際に形を残していくことでそれに応えていくことができるのではないかと考えている。また、自分が所属している大学や学生団体での報告会や、新聞など各種メディアを活用して積極的にアウトプットを行っていく予定である。

関係者の皆様に深く感謝の意を表して私の留学結果報告書とさせていただきます。

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）留学結果報告書



ゼミ生で行ったフィールドワークの際の写真



無形文化遺産 ヴィーザム

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）留学結果報告書



JICA プロジェクトでのトイレ建設現場の視察の際の写真



カンボジアの小学校を訪問した際の写真

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）留学結果報告書



ドイツ人の友人たち



ラオスで出会ったマレーシア人の友人

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）留学結果報告書



タイで再会した友人たち